

訃報 宮村忠 公益社団法人横浜歴史資産調査会会長ご逝去
(関東学院大学名誉教授)

河相論をパイブルとし河川工学を論じた宮村忠先生は、1939(昭和14)年に東京森下の隅田川河岸で生まれ、戦後の動乱期を苦学し東京大学で1974年に博士号を取得。関東学院大学工学部に1982年から勤める傍ら、国土交通省、横浜市等の都市行政、そして水防訓練の地域活動に至るまで幅広くご尽力されました。当横浜歴史資産調査会の会長職も20年近くに渡り担ってきましたが、2022年9月3日に83歳で召天されました。MM21の母体である新港埠頭調査で

は、横浜市の都市デザイン室と協力し横浜市民および市職員のために「宮村河川塾」を主宰。河川工学に留まらず国土経営、地政学そして歴史・文化まで網羅して、自然を守りながら文化生活と協調する接点を見つけようと苦悩する研究生活を貫きました。このような活動が高く評価され、2019年には防災功労者内閣総理大臣表彰を受賞しました。(増渕文男)



リニューアルオープンが迫る横浜赤レンガ倉庫の軌跡

「ハマの赤レンガ」として親しまれる横浜赤レンガ倉庫は今年、文化・商業施設としての開業から20周年を迎えた。現在は改修工事が行われており、クリスマスシーズンにはリニューアルオープンを予定している。



外壁改修工事中の赤レンガ倉庫



100年の歴史を辿ったレンガ壁

倉庫が建つ新港地区は、日本初の係船岸壁型ふ頭として明治32(1899)年から建設が進められた。この中で赤レンガ倉庫は、第二期工事期間中に税関の保税倉庫として着工された。妻木頼黄率いる大蔵省臨時建築部が設計を担当し、2号倉庫が明治44(1911)年、1号倉庫が大正2(1913)年に竣工。戦前は煙草、羊毛、光学機械、食品等を取扱ったが、関東大震災で1号倉庫は半壊し約半分の規模となった。米軍の接収解除後も再び倉庫となるが、山下ふ頭や本牧・大黒ふ頭の整備に伴い取扱量が低下、平成元年に役目を終えた頃には老朽化や落書きが目立った。一方、保存活用の運動は昭和40年代に始まり、昭和60年代から市が本格的な保存活用検討を開始。平成4(1992)年に国から市へ財産移管され、活用検討と構造補強、新居千秋都市建築設計による内部改修を経て平成14(2002)年に開業した。

を最小限に抑えた。営業しながらの工事であったため、3工区に分け外観を残しながら進め、音や振動等が出る作業は全て夜間に行うことでイベントや店舗への影響を抑えた。

レンガの隙間はモルタルで埋められており、ブロック単位の交換は難しい。このため、レンガ一枚毎に手作業で表面から40mm程くり抜き、接着剤を充填しスライスしたレンガを新たに貼る。赤レンガ倉庫は100年以上の歴史の中で繰り返し補修され、一口にレンガと言っても多様な風合いを見せる。この表情を残すため、レンガを希釈した墨汁に浸し色味を変え、更に浸す時間に差を付けることで濃淡のパターンを作り、周囲の色調に合わせて張り合わせた。

歴史的建造物の改修は、歴史の重みを後世に紡ぐ職人的なもので、派手な作業ではない。しかしこの作業の繰返しが、世に二つと無い歴史的建造物ならではの個性に繋がっていく。リニューアルされる赤レンガ倉庫にも訪れていただき、変化を、或いはその「変わらなさ」を楽しんで欲しい。

海に近い赤レンガ倉庫は塩害で劣化しやすく、定期的なメンテナンスが必要である。このため令和2(2020)年から、開業以来の大規模改修が行われている。今回の改修では外壁の他、灯具交換、雨漏り箇所修復、鉄扉補修など様々な工事が実施され、現在は最後の工種である空調設備の更新が進行中である。

外壁を覆うレンガは計約500万枚。まずはドローンの空撮や高解像度カメラにより補修箇所を想定し、レンガ一枚一枚を叩き反響音により浮き等を調査した。健全なレンガは極力生かすよう、レンガの状態を六段階で評価し、交換する箇所



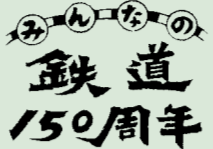
外壁レンガタイルの色合わせ



設備更新の様子

公益社団法人横浜歴史資産調査会の取り組み
YOKOHAMA HERITAGE 文・写真：米山淳一

2022「鉄道開業150周年事業を開催」



明治5年(1872)新橋ー横浜に我が国初の鉄道が開業して令和4年(2022)10月14日で150周年を迎えた。以後、鉄道は全国に延伸。生糸の運搬にも貢献、まさしくレールロードはシルクロード。

当公益社団では日本鉄道保存協会(代表幹事=当公益社団)と力を合わせて「鉄道150周年記念事業委員会」を設け下記の事業を実施した。

1. 記念ロゴの作成 篆刻家 古田悠々子先生の作品
2. 神奈川県と横浜市内の歴史、文化、技術的価値の高い鉄道車両、施設、構造物等を鉄道遺産と位置付けて現況調査を行った。既に保存され、また保存を望む対象約160点を「鉄道の記憶～私たちのまちの鉄道遺産～横浜・神奈川を中心として～」と題した冊子にして、発行配布。
※A4判 58ページ (日本博助成事業)
3. 「私たちのまちの鉄道遺産」写真展開催
冊子に掲載の鉄道遺産約160点と全国近代化遺産活用連絡協議会鉄道部会に加盟する市町村等の対象も併せて展示した。
●期 間：令和4年8月30日～9月16日
●場 所：横浜みなと博物館特別展示室
●入場者：約2,000名 (日本博助成事業)
4. 全国近代化遺産活用連絡協議会 鉄道部会フォーラムの開催
鉄道遺産を保存活用する市町村担当者等が集い連携を深めた。
●開 催：令和4年9月15日 13時～17時
●後 援：神奈川県、横浜市教育委員会
●講 演：神奈川と横浜の鉄道遺産の現状 小野田 滋(公財)鉄道総合技術研究所担当部長
●活動報告：小坂町(秋田県)、桐生市(群馬県)、安中市(群馬県)、しなの鉄道等10市町村 (日本博助成事業)
5. 日本鉄道保存協会横浜大会の開催 令和4年9月16日～17日
●講演：汽車道の魅力 増渕文男(ものづくり大学名誉教授・当公益社団社員)
●開 催：令和4年9月18日
●講 演：岡田 直(横浜都市発展記念館主任調査研究員)、北村圭一(元横浜市港湾局技術担当部長)、米山淳一
6. 歴史を生かしたまちづくりセミナーの開催 都市デザイン室と共催



神奈川臨海鉄道CS6型SLの見学



横浜・神奈川の鉄道遺産を調査しまとめた1冊

モーガン邸再建に向けて

横浜で山手ベリック・ホール、旧ラフィン邸ほか数々の作品を残した建築家J.H.モーガンの自邸が二度の不審火により焼損し、約15年近くが経過。現在、当公益社団とNPO法人旧モーガン邸を守る会が一九となり、藤沢市の協力の元、再建に取り組んでいる。

現在、再建資金はご寄付等を含めまだ約6,000万円であり、目標の1億円にはまだまだな状況。会員や多くの皆様からのご寄付が何よりもありがたいです。ぜひとも格別のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

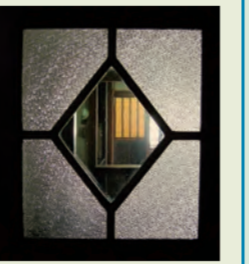


モーガン邸再建予想模型

当公益社団では、再建活用委員会(座長水沼淑子)を設置し、地域の文化交流拠点であるヘリテイジセンターとして再建、管理、運営計画をまとめた。令和4年から2年間の募金状況を踏まえ、令和6年度には再建事業を開始予定である。

寄付のお願い

旧モーガン邸再建のために、みなさまに寄付をお願いしています。一口から何口でもありがたくお受けいたします。
●個人：5,000円(一口)
●団体・企業等：100,000円(一口)
ご寄付頂いたみなさまのお名前は、再建した建物の室内に掲示させていただきます。
※当公益社団への寄付は、税法上の優遇措置が適用され、所得税(個人の場合)、法人税(法人の場合)の控除が受けられます。詳しくは事務局からご案内します。
●振込先：ゆうちょ銀行 ●口座番号：00270-4-124271
●加入者名：公益社団法人 横浜歴史資産調査会 ※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください。



「歴史を生かしたまちづくり相談室」受付中!! 皆様からのご相談をお待ちしています。

【連絡先】公益社団法人 横浜歴史資産調査会(ヨコハマ・ヘリテイジ)内
「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX : 045-651-1730 E-mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp

歴史を生かしたまちづくり
横濱新聞
Y O K O H A M A

第38号

令和4(2022)年
11月30日発行
Since 1989



撮影：米山淳一

山手133番館 復元を超えた、西洋館の再生
関東学院大学名誉教授・公益社団法人 横浜歴史資産調査会 副会長 関和明

昨年(2021年)3月に横浜市の歴史的建造物に認定されて、その後、約一年半以上の復元修復工事を経て見事によみがえった山手133番館。聖坂から山手の丘へ登り切った高台にある敷地からは、眼下に港と海へひろがる光景が臨まれる。山手町の南東部にあるこの敷地は、明治初期から居留地となり、外国人向け住宅が建てられてきたが、この場所は横浜山手の記憶=歴史を現在に至るまで継承していることが、土地と家屋、そして居住者に関する履歴の調査から知られる。現在の山手133番館は、「家屋課税台帳」の記載から、関東大震災後の昭和5(1930)年に建設されたと考えられる。また、Bluff Directoryによると、当初はライジング・サン石油会社の関係者が居住したことが判明している。
木造2階建の主屋と、それに併設されて使用人用の付属屋および車庫があり、当時の外国人居住者の生活様式や社会的ステータスの一端がうかがわれる。主屋の1階

には、居間、応接室、食事室、パントリー(配膳室)、厨房などが配置され、2階には、3つの寝室と2つのバスルームがある。室内の配置と造作、そして細部の意匠には建設当初からの大きな変化は見られない。主屋東側には建設当初からの大きな変化は見られない。主屋東側の付属屋が、厨房を介して主屋と繋がって建てられた。玄関ポーチの外観、大きな開口部、スチールサッシュの使用、カーテンボックスの装飾的なフォルム、照明器具のデザインなどの特徴から、この住宅を設計した建築家はアントニン・レーモンド(および彼の事務所)ではないかと推測され、海外のアーカイブスへの問い合わせやレーモンド事務所の図面資料を含む調査を行った。しかし、現時点では、設計者を確定できる直接的な証拠は見出せなかった。ただ、建設の経緯や戦後における接収期の居住者などの間接的、状況的な事実を参照すると、レーモンド事務所が関与した蓋然性は高いと思われる。元町公園に復元されたエリスマン邸やイタリア山庭

園のプラフ18番館などのように、別の敷地に移築再建される例もある中で、この建物が当初の敷地で復元されたことは、とても貴重である。というのも建物と敷地、その周囲の環境とは本来、密接に関連しているからである。また、復元と修復に関しては、現在の基準での耐震構造補強を施し、開口部の断熱性能、床暖房の設置、浴室や厨房の快適性などを配慮し、現代的な住宅としての居住性も確保している点はユニークで、歴史的建造物として復元保存することを超えて、ここに実際に「住まうこと」もできることを目指して保存が計画されているのである。
この住宅の所有者は、横浜の歴史的な文化の継承に関して、従来から深い理解と強い意思と持たれており、今回は施主として、丁寧な調査をベースにして復元修復工事を進められ、今後の活用についても、魅力的な構想を抱かれています。今後、有意義に、かつ創造的に活用されることを強く期待したい。

「佇まい」を甦らせた西洋館の改修工事

～山手133番館所有者&改修設計者インタビュー～

令和4年10月1日、1年3ヶ月に及ぶ改修工事が終わりを告げ、山手133番館では内覧会を兼ねたコンサートが開かれていた。生まれ変わった洋館のサロンで、洋館所有者の(株)三陽物産が同じく所有する、ドーリング商会(※居留地時代の横浜で活躍した楽器商)が輸入したリードオルガンの音色が響く。舞台裏で三陽物産代表の山本氏は、「係わった人が皆ひたむきで純粋で、とても良い工事だったと思います。」と語っていた。

氏が購入を決めた頃の133番館の姿は今と全く異なり、内外装は白く統一され、庭園は荒れ果てていた。このため133番館の改修は、「再生」という言葉が相応しい大掛かりなものになった。初めに状況調査を行い、耐震補強のため既存基礎に加える抱き基礎や耐力壁を施工。調査中に土台の9割以上の腐朽が判明し、急遽工程を変更し大々的に交換を行った。外壁には高圧洗浄をかけ表面の層を剥がし、明らかになった当初色で色調整を行い復元。屋根瓦は割れている物等を除くと枚数が足りず、他の洋館に保管してあった瓦を集め、なお足りない分は戦前のフラ

ンス瓦の型を使い愛知県窯で焼き対応した。他にも内装復元や設備追加、外構整備など、多岐に亘る工事を行った。

工程のほぼ全てを終えた頃、ようやく洋館の全体像が顕になった。1年3ヶ月の期間、一筋縄でいった工事はほとんど無い。なぜここまで凄まじい熱量を注ぎ込むに至ったのか。一連の工事や洋館について、山本氏と設計を担った(株)ユー・エス・シーの兼弘氏に話を伺った。

——133番館の購入に至ったきっかけは。山本：最初は不動産情報サイトで出ているのを見つけた。外からの印象は微妙だったが、中に入った瞬間に本物の洋館が放つ空気感を感じ、「壊しちゃいけない」と思い保全するため購入した。

——綺麗になった今も空気感が残るが、どのような意識で改修を行ったか。山本：綺麗にし過ぎても空気感が残らない。残せる所は残して雰囲気を感じられるようにしたくて、兼弘さんに声をかけた。兼弘：「洋館の佇まい」という点は強く意識した。100年残る建物には共通し

て人に愛される佇まいがある。最初に見た時は改変が多く佇まいが覆い隠されていたが、「本当だったら」という姿を明らかにしていくよう設計した。

山本：そういう現場だったから、職人さんのやる気も普通の工事と違ったと思う。全国からその道何十年の匠が集まり、一つで議論し腕を揮う光景は圧巻だった。

兼弘：山本さんも毎日のように現場にいたが、そこまでの情熱を施主が注いでいる、と現場が感じ取って良い仕事に繋がったと思う。

——なぜ歴史文化を残す取り組みを続けているのか。兼弘：133番館のような保存修理の場の意義の一つとして「技術の伝承」がある。技術は場が無いと失われ、復活することは容易でない。日本人は昔から輪廻転生を繰り返す木造建築と付き合っていて世界トップクラスの木材を大切に技術を持っていたと思う。それが戦後の高度経済成長期で木造建築が非常に短命な国になってしまっ

て、輸入木材によるスクラップ&ビルドを繰り返して国内林業は衰退し、日本の建築文化や精神が失われる危機感があった。だから見た人に優れた建築文化を残すことが大事だと少しでも感じて欲しく、仕事を続けている。山本：私は魅力的なまち＝個性あるまちだと思っていて、個性はまちに積み重ねられた歴史が表現するものだと思う。この150年で横浜ほど激動したまちは無いが、生まれ育つ中で個性が徐々に失われるのを見てきた。だからこそ自分が関わり街並みや文化を残したい。133番館は居留地がルーツで、庭を発掘したら震災前のもと思われる瓦やレンガが出る。そして133番館が建ち、都市や文化を作った多くの人を受け入れてきた。ここは横浜の個性を象徴する履歴を持つ場所だと思う。そうした場所を自分の手で守っていきたい。



ライトアップされる133番館

を繰り返して国内林業は衰退し、日本の建築文化や精神が失われる危機感があった。だから見た人に優れた建築文化を残すことが大事だと少しでも感じて欲しく、仕事を続けている。山本：私は魅力的なまち＝個性あるまちだと思っていて、個性はまちに積み重ねられた歴史が表現するものだと思う。この150年で横浜ほど激動したまちは無いが、生まれ育つ中で個性が徐々に失われるのを見てきた。だからこそ自分が関わり街並みや文化を残したい。133番館は居留地がルーツで、庭を発掘したら震災前のもと思われる瓦やレンガが出る。そして133番館が建ち、都市や文化を作った多くの人を受け入れてきた。ここは横浜の個性を象徴する履歴を持つ場所だと思う。そうした場所を自分の手で守っていきたい。

インタビュー全文はHPにて公開している。

スマートフォンから

パソコンから

横浜 歴史を生かしたまちづくり 検索



オルガンコンサートの様子



(株)ユー・エス・シー代表 兼弘彰氏(左) (株)三陽物産代表 山本博士氏(右)

震災復興橋梁「長者橋」が歴史的建造物として認定

大岡川に架かる震災復興橋梁の「長者橋」が、令和4(2022)年3月24日に認定歴史的建造物として認定された。認定歴史的建造物として98件目、橋梁としては15橋目となる。認定を受け、同年5月8日に記念式典が開催された。式典では船が運航され、長者橋下の船上で地元ミュージシャンによる演奏も行われた。晴天のなか橋を中心に賑わいを見た。大正12(1923)年の関東大震災で被災した東京・横浜の復興のために、国、府、



長者橋

市によって施行された震災復興事業によって建設された橋梁は震災復興橋梁と呼ばれる。火災により木造の橋梁が焼け落ち、多くの人々が逃げ場を失い犠牲となったことを踏まえ、耐震耐火を目指すとともに短い期間に多くの橋梁を建設する必要がある、なるべく標準的な設計に基づいて建設された。その一方でそれぞれの橋の個性を演出するために、親柱や高欄などのデザインや意匠面で様々な工夫がある。

長者橋は、震災復興橋梁として数少ない鉄筋コンクリートアーチの橋梁形式が重厚感を示すとともに、繊細なデザインが美しさを醸す優美な外観と、みかけ石張り形で形作られた細やかなディテールが組み合わせられ、優れた都市空間の形成に大きく寄与している。

「旧円通寺客殿」の復元が完了し公開開始

令和4(2022)年4月1日、復元整備を終えた旧円通寺客殿(木村家住宅主屋)が金沢八景権現山公園開園にあわせて公開された。特定景観形成歴史的建造物を活用した茅葺古民家の復元としては、旧藤本家住宅に次いで市内二例目にあたる。円通寺客殿は、万治年間(1658~61年頃)建設の東照宮を管理する別当寺として創建された円通寺境内に、東照宮の参拝客をもてなすため建築された。慶応4(1868)年、円通寺廃寺に伴い僧侶の木村芳臣氏が還俗(出家した者が俗人に戻る)ことし、木村家住宅となった。平成7(1995)年の市認定歴史的建造物への認定後、金沢八景駅周辺で進められていた土地区画整理事業に伴い決定した金沢八景権現山公園整備において、園内施設として活用されることとなった。

不特定多数が訪れる公園施設には耐震等の安全性確保が必要である。このため、部材を全て解体保管し腐朽箇所を交換、

健全な材を利用して再構築する整備が行われた。また、特定景観形成歴史的建造物制度を活用し、代替措置を講じて建築基準法令を適用除外することで、本来法令に適合しない茅葺屋根の復元が叶った。こうした工夫により、安全性と古民家の趣の双方を担保している。園内には、地域のシンボルとして愛されてきた桜の古木が移植されている。山中の展望台へ足を運ぶと旧円通寺客殿や桜、遠くには平潟湾が見え、かつての景勝地の姿に想いを馳せることができる。



旧円通寺客殿(木村家住宅主屋)

横浜の都市デザイン50周年! 横浜の個性と魅力あるまちづくりを伝える企画続々

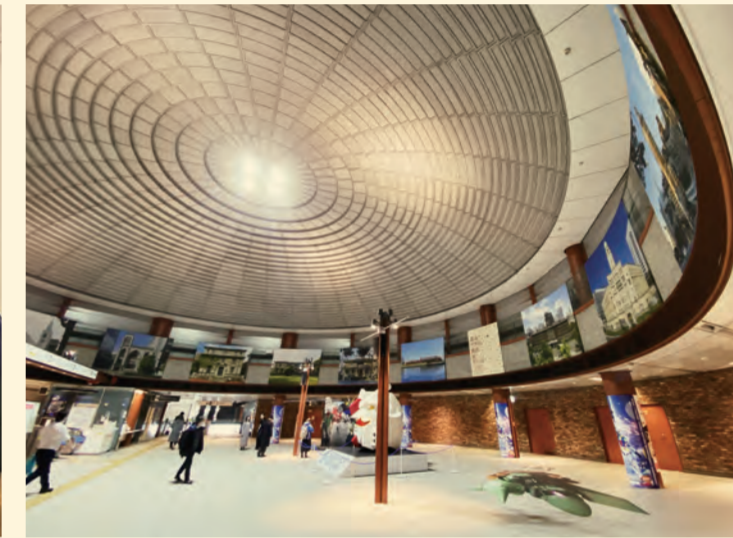
令和3(2021)年は、昭和46(1971)年に専門部署である「都市デザイン担当」が設置されてからちょうど半世紀にあたった。都市デザイン室ではこの間、様々な手法を用いながら、横浜の魅力づくりに取り組んできた。50年という節目の年を迎え、横浜の都市デザインについて、広く市民や企業の皆さまとこれまでの取組を振り返る展示や講演会、展示会、他主体との連携企画等を行った。ここにその一端をご報告したい。

プレ展示@横浜市役所

2階プレゼンテーションスペース等で都市デザインの取り組みのエッセンスを



展示会場エントランスの模型を鑑賞する来場者



馬車道の展示

講演会@オンライン&市役所

50年間の様々な取り組みやプロジェクトを取り上げ、当時の関係者に講演戴いた。第1回は都市デザインの萌芽期について、第2回は水と緑のまちづくり、第3回はみなとみらい21のまちづくり、第4回は歴史を生かしたまちづくり、第5回は港北ニュータウンをテーマにそれ

歴史を生かしたまちづくりセミナー Vol.44

鉄道の記憶を生かした横浜のまちづくり

令和4年(2022)年9月18日(日)、横浜みなと博物館第1・2会議室で「鉄道の記憶を生かした横浜のまちづくり」と題してセミナーが開催された。登壇者3名による講演・対談形式。会場・オンラインの併用実施で、参加者は計約130名であった。

はじめに(公社)横浜歴史資産調査会常務理事の米山淳一氏から、国内外の事例写真を用いて、鉄道遺産の活用が如何にまちの活性化に有効であるかを説明された。続いて、横浜都市発展記念館主任調査研究員の岡田直氏からは、横浜駅の変遷と都市の発展について説明された。

後半では、元港湾局長の北村圭一氏より、汽船整備の解説や、象の鼻パーク整備担当者(当時)ならではの苦労や



講演の様子(北村氏)

想いを写真・映像などを用いて説明された後、米山氏との対談で当時を振り返った。

岡田氏の講演の中で、初代横浜駅がスイッチバックだった理由が、ルートを中山道で想定していた当初、行き止まり式で設計されたためであるという話になると、会場からは思わず感心の声が漏れた。講演後の対談では、象の鼻パーク整備中に転車台が発掘されたことを受け



質疑応答の様子(米山氏・岡田氏)

て、保全のため急遽計画を変更した話や、パーク内のパネル照明が時間によって変化する意味などの話が展開され、裏話に会場も盛り上がりを見せた。貴重な話の数々に質疑応答も活発に交わされ、盛況のうちセミナーは終了した。

それぞれ当事者として関わった方々にご講演いただいた。参加者からは「知らなかった横浜の魅力について理解を深めることが出来た」「これまでとは違う視点でまちをみるきっかけとなった」など様々な感想が寄せられた。

展示会@BankART KAIKO

「都市デザイン 横浜」展～個性と魅力あるまちをつくる～と題して、令和4(2022)年3月5日から4月24日までの48日間開催されたこの展示会には、延べ万人を超える方々が来場された。同時に発行販売された「都市デザイン 横浜」は、50年間の取り組みを書籍にまと

めた集大成であり、展示会期間中に約3千冊の販売数となった。

「Spin-off: 都市の記憶と、継承するデザイン」と題し、BankARTが上記展示会に先駆けて開催。横浜を代表する歴史的建造物の大判写真が改札内のサークルに勢揃い。「横浜がいかんして今の横浜になったのか、それは、街の中に残された歴史的建造物がその過程を今に伝えているからである。」という企画側の思いを体感できる空間となった。

この他、様々な方々の積極的なご協力により、様々な企画が実現した。多くの協賛や温かい御支援をいただいた上に、これらの企画が成就したことを特筆したい。51年目となる今年度は昨年度の振り返りを元に、様々な方々にもご参加頂きながら未来を描いていく企画を計画中である。

都市デザイン室では新たにTwitterを開発し、50周年記念事業のみならず都市デザインの様々な取り組みについて情報発信している。是非、アクセスしていただきたい。アカウント名は、

【@yokohama_ud】

歴史的建造物「ガス山煉瓦造建造物」煉瓦壁が蘇る

中区本郷町ガス山公園の奥に急斜面地を開削して造られた横浜市歴史的建造物「ガス山煉瓦造建造物」(平成23(2011)年に登録)がある。令和3(2021)年度に補強のため煉瓦の積み直しを中心とした改修工事が行われ、煉瓦壁が蘇った。

ガス山煉瓦造建造物は、明治中期から大正期ごろに造られたと考えられ、内部はかまぼこ型のヴォールト天井をもつ二つの部屋で構成される。どちらの部屋にも、天井の頂部には斜面上部まで抜ける土管の空気穴があり、熱気を屋外に逃がして内部の温度を一定に保つ構造となっ

ていることから、建造当時、ビール工場関連の貯蔵施設であった可能性がある。市内に現存するヴォールト天井の煉瓦建造物はこのほかに、明治期に造られたジュラルム水屋敷地下水槽(中区元町公園内)や旧居留地消防隊地下水槽(中区日本大通13)がある。



改修後のガス山煉瓦造建造物

港町・横浜のより魅力的な夜景を目指して～夜間景観形成ガイドライン策定～

昭和61(1986)年に全国に先駆けて開催した「ライトアップヨコハマ」。ライトアップという言葉がまだ一般的に使われていなかった時代から、全国に先駆けて夜間の演出に取り組み、時間をかけて横浜らしい夜間景観を創り上げてき



撮影: 森日出夫

た。横浜らしい夜景に磨きをかけ、より魅力的な都市を目指すため、「横浜市都心臨海部夜間景観形成ガイドライン」を令和4(2022)年7月に策定した。ガイドラインでは、落ち着いたある夜間景観を更に魅力的にすること、イベント時は創造性豊かな質の高い演出を目指すこと、夜間における安全安心で快適な歩行環境をつくることなどを、誘導していきたい方向性として取り纏めている。ガイドラインの活用により、横浜らしい夜景に磨きをかけていくことで、都心臨海部における経済活性化やナイトタイムエコノミーが一層推進されることが期待される。